

夫婦パスタ日記

第11話『舞茸とベーコンのバター醤油パスタ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

長 沢 理 恵（22） 小説家、ペンネーム…若水エリ
長 沢 清 之（25） 理恵の夫、出版社『みらい書房』取締役

長 沢 聡 志（10） 理恵と清之の息子、デザイナー
長 沢 唯（30） 聡志の妻、洋菓子店『ヴェール』パティシエ

寺 川 千 晴（25） スーパー『ユーミー』レジ担当
権 藤 浩 一（60） 洋菓子店『ヴェール』店主

長 沢 美 彩（6） 理恵と清之の娘（写真）

出版社『みらい書房』専務取締役（回想）

出版社『みらい書房』の社員たち

スーパー『ユーミー』の客

洋菓子店『ヴェール』の従業員たち

1 長沢家・全景（朝）

レンガ模様の壁の洋風建築の造り――。

2 同・二階の理恵の部屋

書斎となっており、本棚には『若水エリ』と書かれた単行本や文庫本が何冊も並んでいる。

机の上の原稿用紙に向かって、万年筆をコツコツと叩いている理恵（ペンネーム…若水エリ）。

原稿用紙は、真っ白である――理恵、原稿用紙をばらまいて、

理恵「ああ、書けないッ……」

と、かけていた老眼鏡を外す――と、外から階段を上ってくる音が聞こえ、エプロン姿の夫・清之（58）が勢いよく入ってくる。

清之「理恵さん、原稿のほう、どうですか？」

理恵「無理、書けない」

清之「理恵さん……」

理恵「ミステリーのつもりで新作書き始めたはずなのに、どうも上手くイメージがわからないの」

と、大きく溜息をついて、頬杖をつく。

理恵（N）「私の旧姓である『川澄理恵』をアナグラムにした『若水エリ』のペンネームで作家活動をして早三十四年。数々のミステリー小説でベストセラーの記録を私は出してきたが、近頃原稿の筆が進まないという問題に直面していた」

清之、原稿用紙を拾いながら、

清之「理恵さん、もう明後日はクリスマスイブだし、この際年末年始はゆっくり休んだらどうでしょう？　行き詰まった状態で原稿書いても、良いものは書けませんよ」

理恵「分かってるよ、そんなこと。けどさ、一枚でも書かないと、私の作家人生おしまいじゃない」

清之「一枚でなくても、一行、いや、一文字でも書けたら十分です」

理恵「もう昔みたいに書けないのかなあ」

清之「二十七日から、聡志が唯ちゃんと一緒に帰って来るって。その間は、ゆっくり休ましようよ」

理恵「聡志、帰ってくるの？」

清之「母さんに連絡してもどうせすぐに忘れるだろうからって、僕に連絡がありました」

理恵「聡志たちが帰って来るまでに、せめて第二章までは書き終えたいの。こんな姿、あの子たちに見せたくないじゃない。余計な心配かけるだろうし」

清之「そうやって目標を立てるのは良いことですけど、無理はいけませんよ（と理恵の前に原稿用紙を置く）」

理恵「もう少し頑張ってみるわ」

清之「では、僕は下にいますから（と出ていく）」

理恵、万年筆を持って、頭を掻きながら書き進める。

タイトル——夫婦パスタ日記

第11 話『舞茸とベーコンのバター醬
油パスタ』

3 長沢家・リビング

洗濯物を畳んでいる清之——理恵のこ
とを気にして、天井を見上げる。

清之（N）「妻が小説家デビューしたのは、
今から三十三年前。都内の大学の文学部に
在籍していた女子大生でした」

4 出版社『みらい書房』本社ビル・文芸部
（回想）

T 『33 年前』

クリップ留めされた何十種類もの原稿
が、山積みになされている——その中の
一つに目を通してゐる清之（当時
25 ）。。

清之（N）「僕は大学進学を機に名古屋から
上京し、新卒で出版社『みらい書房』に就

職。初めは編集アシスタントとして漫画部所属で、一年後にアシスタントから編集者に昇格、更に一年後に文芸部へ。そして異動してすぐにミステリー新人賞の担当を任せられ、そこで審査員たちをアツと言わせるほどの作品を応募してきたのが、理恵さんでした。この時は、まさか後になって自分の妻になるとは思ってもいませんでした」

5 同・会議室（同）

清之と理恵（当時22）が向かい合うようにして話している。

理恵「私、一生をかけてこの仕事をしたいと思ってます」

清之「川澄さん……」

理恵「私にとって、書くことはすなわち生きることなので」

清之（N）「初対面の時に言われた彼女の言葉は、今でもはっきり覚えています。この新人作家を編集者として育てていきたいと、

若い僕も思っていました。同時進行で何人もの作家の担当をしましたが、三歳差という同年代もあったのか、僕の彼女への思い入れは強いものでした。作家を贔屓しないように、当時の文芸部長に言われたこともありましたが、気がつけばお互いに欠かせない存在になっていました」

6 長沢家・二階の理恵の部屋（現在）

頭を抱えながら、原稿を何とか進めている理恵――机の上に置いてある写真立て。

写真立てに映る理恵（当時35）、清之（当時38）、息子・聡志（当時10）、娘・美彩（当時6）が揃った家族写真。

清之（N）「二十七歳の時に理恵さんと結婚し、一年後には息子・聡志が、その四年後には娘・美彩が誕生しました。その間も、僕は理恵さんを公私にわたって支え、そし

て父親として息子と娘を妻と共に育て上げてきました」

7 出版社『みらい書房』本社ビル・廊下

（回想）

清之（当時38）が歩いている。

清之（N）「長らく編集者として現場一筋を貫いていた僕に転機が訪れたのは、今から二十年前のことです」

8 同・専務室（回想）

清之と専務取締役が話している。

専務「実は、福岡に異動してもらいたいんだ」

清之「え、福岡ですか……？」

専務「うちの業務拡大のために、福岡に支社を作る話が出る。君には、副支社長として、業務が安定するまで現地に留まってほしいんだ」

清之「はあ……」

専務「家庭があることも、君が奥さんである

若水先生の編集担当をしてることも承知だ。
だが、我が社のために福岡に行ってほしい」
清之「……」

9 長沢家・リビング（回想・夜）

清之（N）「正式に人事異動の発表がされた
日の晩のことです……」

清之と聡志（当時10）が話している。
清之「父さんがいない間、この家のこと頼め
るか？」

聡志「まあ、何とかなるよ。俺、父さんと母
さんの息子だから」

清之「ありがとう。もう四年生にもなれば、
言うことが違うな。さすがはお兄ちゃんだ。
何かあったらいつでも連絡しなさい。父さ
ん、いつでも駆けつけるから」
大きく聡志に頷く清之。

10 同・夫婦の部屋（回想）

引越しの荷造りをしている清之。

清之（N）「人事異動を受け入れるにあたり、唯一僕は専務に条件をつけてもらいました。それは異動後も、理恵さんの編集担当を継続させてほしいということでした。デビュー時から支えてきた彼女を、このタイミングで別の担当者に任せるという考えは僕には思いつきませんでした。渋々その条件を上層部が飲んでくれたことで、僕は『みらい書房』福岡支社副支社長兼若水エリ担当編集者として仕事することになりました」

11 長沢家・ベランダ（現在）

清之が洗濯物を干している。

清之（N）「副支社長としての業務は、主に支社長のフォローなど、経営に関することばかりでした。福岡支社が何とか軌道に乗った五年目に僕は本社に戻り、二年後には文芸部長に昇格。編集者として現役ではなくなりましたが、ここでも唯一、理恵さん

の担当編集は継続することになりました」

12 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役室（回想）

T 『7 年前』

デスクで仕事をしている清之。

清之（N） 「そして今から七年前に、『みらい書房』の取締役兼文芸部担当執行役員というポストに就き、現在に至ります」

13 長沢家・リビング（現在）

掃除をしている清之——二階から理恵の声が聞こえてくる。

理恵の声 「ああ、もうッ……」

清之、気づいて階段を上っていく。

14 同・二階の理恵の部屋

机に突っ伏すようにして顔を沈めている理恵——ノック音が聞こえ、清之が入ってくる。

清之「理恵さん、少し息抜きでもしたらどうですか？」

理恵「息抜き？」

清之「散歩とか、買い物とか、一旦頭をリセットして、原稿以外のこと考えてみましようよ」

理恵「そうね……。小一時間、ちよつとぶらついてくる」

清之「行ってらっしゃい」

15 街（夕）

厚手のコートを羽織った理恵が歩いて
いる——周囲はイルミネーションで輝
いており、クリスマスの曲が聞こえて
いる。

理恵（N）「気分転換の外出と言いつつも、
目的がなかったため、どうしたら良いもの
かと、私はさまよっていた。頭をリセット
するように夫に言われたものの、結局作家
の性分で、執筆中の作品のことが頭から離

れることはなかった」

16 洋菓子店『ヴェール』・表々店内（夕）

理恵がやってくる。

理恵（M）「糖分摂取すれば、少しは変わるかな」

と、ドアを開けて入店する――接客担当の従業員が振り向いて、

従業員「いらっしゃいませ」

と、奥の厨房で洋菓子作りをしている

唯、浩一、その他パティシエたち。

唯「（気づいてやってきて）お義母さん、いらっしゃいませ」

理恵「しばらくだったわね、唯ちゃん」

唯「珍しいですね。お義母さんがいらっしゃるなんて。まさか、原稿進んでないとか？」

理恵「そうなのよ。うちの人にね、気分転換で外出でもしたらどうかって言われて、目的もなくこの辺りブラブラしてたってわけ」

と、浩一もやってくると、

浩一「これはこれは若水先生、ご無沙汰します」

理恵「随分、メニュー増えましたね」

浩一「うちの従業員たちに商品企画をさせるようにしたんですよ。どうも私一人だけでメニューを考案するのは、限界がありましたね」

理恵「そうですね。自分で思っている以上に、限界ってすぐに来ますよね」

浩一「久しぶりに来店してくださったんですよ。ゆっくりご覧になってください。私、ちょっと打ち合わせで出なきゃいけないもので」

理恵「すいません、お引き止めしちゃって」

浩一「いえいえ。（と唯に）長沢、あと頼んだぞ」

唯「はい。行ったらっしやい」

と、会釈をして去っていく浩一。

唯「お義母さん、もし息抜きされるんだったら、パスタでも作ってみたらどうですか？」

理恵「ああ、パスタね。そういえば昔は、よ

く作ったものよ。締切ギリギリの時は、聡志が作ってくれたこともあったわ」

唯「私、無性に食べたくなる時があるんです、聡志が作るパスタ」

理恵「単身赴任してた間にも父親にいろいろ教えてもらったみたいでね、私が聡志からレシピ教えてもらったことも結構あるのよ」

唯「だからレパートリー多いんですね」

理恵「あ、クリスマス直前だといろいろ忙しいでしょ。ごめんね、変に引き留めちゃって。ケーキ買ったなら、すぐ失礼するから」

唯「ゆっくりご覧になってください」

理恵「ありがとう」

17 スーパー『ユーマー』・店内（夜）

買い物カートを引いて、各コーナーを回っている理恵。

× × ×

レジの前で、カゴを出す理恵——カゴの中に入っている舞茸のパック、真空

パックされたブロックベーコン、刻み
ねぎのパック。

商品の一つずつ手に取って、バーコー
ドスキャンをする千晴。

千晴「五番の精算機にお願いします」

と、買い物カゴを運ぶ――精算機で会
計を済ます理恵。

18 長沢家・リビング（夜）

買い物袋とケーキの箱を持った理恵が
帰宅する。

理恵「ただいま」

新聞を読んでいた清之が振り向いて、

清之「お帰りなさい。気分転換はできまし
た？」

理恵、ケーキの箱を清之に渡し、

理恵「唯ちゃんの店行って、抹茶のムースケ
ーキとショコラケーキ買ってきた。年末す
ぐ会うのにね、ブラブラしてたら、ちよう
どお店の前まで来ちゃってたの」

清之「誰か人と会うのも、大事な息抜きですよ」

理恵「今晚、私が作るわ」

清之「料理も良い現実逃避になるでしょう。

何作るんですか？」

理恵、買い物袋から、舞茸のパック、
ブロックベーコン、刻みねぎのパック
を取り出して、

理恵「唯ちゃんにね、パスタでも作ってみた
らどうかって言われたの。それで『ユーミ
ー』行って、舞茸とベーコンと刻みねぎ買
ってきたのよ。これで、パスタでも作ろう
と思っ」

清之「良いですね。楽しみにしてます」

理恵「舞茸とベーコンのパスタってね、昔聡
志が作ってくれたのよ。しかも、聡志はあ
なたに教わったんだって」

清之「ああ、そういうえばそんなもの教えまし
たね」

理恵「あなたが単身赴任でない間、聡志に

任せきりだったわよね。家事も結構頼んじ
やったし、美彩の面倒だってお兄ちゃんと
して見てくれて」

清之「おかげで美彩も、お兄ちゃんになっ
てましたよね」

理恵「そんな美彩だって、今じゃアメリカで
バリバリ仕事してるし、本当に私の子とは
思えないわよ」

清之「聡志も美彩も、立派に育ちましたよ」

理恵「あなたが単身赴任でいない間に、聡志
なんて料理の腕結構上達したしね」

清之「あの頃の聡志にとつての五年は、大き
いんでしょよね」

理恵「それで、私やあなたのことを、ちゃん
と知り尽くしたのよ。ほら、あなたが役員
になるって話があった時だってさ……」

19 同場所（回想）

T『7 年前』

理恵（当時48）、清之（当時51）、

聡志（当時23）が話している。

理恵「もうあなたには散々助けてもらったわ。私のことは次世代に交代させて、あなたは役員としての仕事をしてよ」

清之「本当は役員なんて向いてないですよ。僕は編集者という現場のほうに性合ってます。何なら、ずっと続けていきたいんです。だからたとえ役員になっても、僕は理恵さん、いえ、若水エリ先生の担当を外れるつもりはありません」

聡志「それで良いじゃない。仮に新しい編集者に代わってごらんよ。こんな母さんに振り回されちゃ、三日と持たないよ。父さんしか、母さんの担当できる人なんていないんだから」

理恵「聡志にまでそんなこと言われちゃうのね、私って。やっぱり私の担当は、お父さんが良いのかもね」

清之「ああ、ありましたね」

理恵「当時のこと思い出しながら、パスタ作
つてみるわ」

× × ×

以下、調理工程をカットバックで。

理恵、舞茸を薄切りにする。

理恵（M）「舞茸百グラムは、食べやすい厚
さに薄切りにする」

理恵、途中で指を切りそうになる。

理恵「危なッ……」

清之が慌てて振り向いて、

清之「大丈夫ですか？」

理恵「うん、平気平気」

と、舞茸を切り続ける。

× × ×

理恵、ベーコンを拍子切りにする。

理恵（M）「ベーコン百五十グラムは、拍子
切りにする」

× × ×

理恵、IHコンロの上に鍋を置き、水

を入れて、火にかける。

理恵（M）「パスタを茹でる水と塩のバランスについて、息子が教えてくれた」

21 同場所（回想）

理恵の視点——聡志がパスタを作っている。

聡志「（カメラ目線で）水に対して、塩はパーセント。つまり水二リットルでパスタ茹でるんだったら、塩は小さじ四だからね」

× × ×

聡志「いい、母さん。効率よく作るんだったら、パスタ茹でる間に、具材炒めるんだよ」

22 同場所（現在）

鍋の水が沸騰する直前——理恵、鍋に塩を入れる。

理恵（M）「息子の言う通り、二リットルの水を強火にして、沸騰する直前に塩小さじ

四杯を入れる」

理恵、パスタを入れて茹で始める。

理恵「そしてパスタ二百グラムを入れて、規定の時間通り茹でていく。『七分茹で』と、パスタのパッケージに記載があった」

理恵、冷蔵庫に貼られているキッチンタイマーを七分に設定し、ボタンを押す。

× × ×

理恵、鍋の隣にフライパンを置く。

理恵（M）「息子の言葉を思い出し、同時進行で具材を炒めていく」

理恵、フライパンにバター、舞茸、ベーコンを入れて炒める。

理恵（M）「フライパンに、バター二十グラム、薄切りにした舞茸、拍子切りにしたベーコンを入れて、全体に火が通るまでしっかりと中火で炒めていく」

× × ×

理恵、お玉で鍋の茹で汁をフライパン

に入れる。

理恵（M）「火が通って、舞茸がしんなりし、ベーコンに焼き色がついたら、パスタの茹で汁をお玉二杯分すくって、入れる」

× × ×

理恵、計量スプーンで醤油を入れる。

理恵（M）「そこへ更に醤油大さじ一杯を加えて、煮詰めていく」

× × ×

キッチンタイマーが鳴る——理恵、キッチンタイマーを止めると、鍋の茹で上がったパスタをトングでフライパンに入れる。

理恵（M）「ちょうどパスタが茹で上がったので、パスタをフライパンに入れ、弱火にする」

理恵、フライパンを振る。

理恵（M）「フライパンを振って、具材とパスタを絡ませていく」

× × ×

理恵、二枚の皿にそれぞれ盛り付け、
上から刻みねぎを散らす。

理恵（M）「皿にも盛り付けたら、刻みねぎ
を適量散らす」

理恵「できた！」

23 完成した『舞茸とベーコンのバター醤油
パスタ』

24 長沢家・リビング（夜）

理恵、完成したパスタをテーブルに運
んでくる――清之、新聞を閉じてやつ
てくると、

清之「美味しそうですね。理恵さんのパスタ
は久しぶりですよ」

理恵「聡志に教えてもらったやつよ」

清之「ああ、確かに教えました、聡志に」

理恵「材料も作り方も難しくないからって、
あの子結構作ってくれたのよ。だから私も、
何となく頭の中でレシピ覚えてたの。おか

げで、良い息抜きになったわ」

清之「それは良かった。じゃあ、いただきます
しょう」

理恵「ええ」

理恵・清之「いただきます」

と、それぞれ食べ始める。

清之「これは美味しいですよ、理恵さん」

理恵「良かった。でもこれ、最初はあなたが
作ったんでしょ？」

清之「ええ。確か福岡にいる時に、レシピ本
見て作ったんですよ。うちの社で出した本
でしたね。それを私が、聡志に教えました」

理恵「あの子、勉強や部活もあったのにさ、
少しでも私に執筆に専念してほしいからっ
て家のことやってくれて」

清之「そういえば、聡志には反抗期らしい反
抗期はありませんでしたね」

理恵「聡志に頼り切りだったわよね、私。特
に中学三年の時なんて、よくよく考えたら
受験生だったのにさ、すっかり聡志におん

ぶにだっこだったわ。中三にもなれば、もう一通り家事ぐらいできるだろうと、結構甘えちゃってたわね」

清之「あいつはよくやってくれましたよ。自慢の息子です」

理恵「ふとフォークを置くと、

理恵「その自慢の息子に、私から母親として、改めてプレゼントしたいと思ってることがあるの」

清之「何ですか？」

理恵「今度の新作、装丁デザイン、聡志にお願いできないかしら」

清之「理恵さん……」

理恵「分かってるわよ、『みらい書房』で出版する本の装丁は、『みらい書房』と契約しているイラストレーターやグラフィックデザイナーが担当することが原則だったとは。だからこれまでだって、私が執筆した小説の表紙イラストや全体の装丁デザインは、契約してるクリエイターたちが作っ

たじゃない」

清之「……」

理恵「私のわがままだって言うのは分かってる。けど、聡志だって今は自分の屋号でやってるでしょ。思いっきり私の遺伝じゃない、自分一人で何かをやりたいところなんて特に」

清之「まあ、否定はしませんよ」

理恵「少しでも、聡志に仕事与えてあげなきゃと思つて。それで、聡志に装丁デザインをやってもらいたいと思つてるの。これまで夫婦二人三脚で作ってきた作品に、今度は子どもも関わる。家族で作る書籍があつても良いんじゃないかしら」

清之「……」

理恵「私だって、いつまで書けるか分からない。これまでスランプに落ちたことは何度もあつたけど、今回は史上最大というか、前代未聞というか、ここまでの状態になつたのは初めてなのよ。私が筆を折る前に、

せめて聡志に、装丁デザインをさせてあげたい」

清之「（大きく頷いて）分かりました」

理恵「本当！？」

清之「僕は理恵さんの担当編集者です。理恵さんの作品をどのようにしていくのか、その作業工程の管理と責任が僕にはあります。そして何より、編集者が一番大事にしなければいけないのは、担当する作家さんの意志を尊重することです。理恵さんが、聡志に装丁デザインをさせてあげたいと言うのなら、僕は喜んで聡志にその話をしますよ」

理恵「あなた、ありがとう」

清之「早速、明日聡志に連絡してみます」

理恵「母親として自分ができることをしてあげようと思ってる。今からでも遅くないでしょう」

清之「ええ」

理恵「そのためには、編集者でもあるあなたの力が必要だし」

清之「任せてください。パスタ、冷めちやいますよ」

理恵「ああ、そうね」

と、再びパスタを食べ始める。

25 出版社『みらい書房』本社ビル・全景
(翌朝)

26 同・一階ロビー

清之が出社してくる――すれ違つていく社員たちが、次々に清之に頭を下げていく。

社員たち「おはようございます」

清之「おはようございます」

27 マンション・長沢家・玄関くDK(朝)

靴を履いている出かける唯が、靴を履いている。

唯「行ってきます」

台所で皿洗いをしている聡志、それへ、

聡志「行ってらっしゃい」

と、出ていく唯——そこへ、聡志のスマホに着信が来る。

聡志、水道の水を止めてタオルで手を拭くと、電話に出る。

聡志「（電話に）もしもし父さん、どうしたの？」

28 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役室

デスクに座ってスマホで電話をしている清之。

清之「（電話に）ああ聡志、朝から悪いな。ちよっとお前に相談したいことがあるんだけど、近いうちに時間取れるか？」

29 マンション・長沢家・聡志の仕事部屋
電話をしながら聡志が入ってくる。

聡志「（電話に）ああ、ちよっと待ってね。（と鞆の中からスケジュール帳を出す）

えっとね、十二月二十三日なら大丈夫だけ
ど。時間はいつでも良い」

30 出版社『みらい書房』本社ビル・取締役
室

スケジュール帳を見ながら、電話をし
ている清之。

清之「（電話に）分かった。じゃあ、二十三
日の午前十時、うちの会社来れるか？ あ
あ、無理言ってすまんが、頼む。それじゃ
あ（と電話を切る）」

と、デスクの上に置いてある写真立て
を見つめる——写真立てに映る清之、
理恵、聡志、美彩。

31 長沢家・二階の理恵の部屋

一心不乱に、原稿用紙に向かって万年
筆を走らせる理恵。

つづく